和訓栞

衣手之部

五

津田文庫
文庫 1
1604
5

早稲田大学圖書館藏書

倭訓栞前編五

衣の部

洞津　谷川士清　纂

え

兄(コノカミ)をえといへり○日本紀に胞を訓せり○得はうけ反え又うとも通す○敢をよむは神代紀に不敢来をえこずとよめりあへ反ええうは結語にそなえさる也あらず続日紀にえならしめへをえせさへ兄事と云ふはえは飯也あへとは万葉集に不勝の字をよめり○吉をよむは経古をもみのえ日吉をひえといふ是もよしと通せりよて古事記乃訓によみて好をみえても好といひ日本紀に訓にはよけんをえけんとよめり今もよいをえいといへり○可愛二字をよむは神代紀にみえて又古事記に愛一字をよめり親愛の辞也又訓にえをしまかんとよめるえも同義にや一書には善の字を填らるは吉と義同じ○枝肢はえださ乃略語也○柄は枝の義なるべし○江は海の枝といふ義にや訓にもそ江ふとり江なり江の何江字をよめり○盛衰記に伊勢国の源人江三郎高盛とかけるは度会郡江村の庄頭に伊勢三郎と称せり○江侍従といひしは赤染衛門の女なり

つだ文庫

○日本紀に朴を訓せり今榎をよめり和名抄に見ゆ亦作檟といへりえのき
ともいふ爾雅鄭註通雅正字通なとによる日本紀によめる是也といへり
或ハ嫛樹也ともいへり四抱ありしえの木にうめく事ありて数日に及へ
る数年故なくて枯ぬこハ伊勢安濃郡神納村の神木にて新くらなる木
なり○荏ハ倭名抄にみえたり今え胡麻といふ○役をえとよむハ音をもて
訓とする例なり役小角ハ役氏なる故に音便にてえんとよみ来れり○縁をえ
といふも同しく多く仮によみせてよめり続撰集に

水鳥のあるゝ沼の江に年を経てかよふもかりそめなりけれ

○薩摩國頴娃(エノ)郡二字にてえとよむハ娃ハ頴の響きなり神代紀に可愛二字
をえとよむる故に埃を填らけたり○哀埃愛をえとよむハ第一音を第二音に轉する例
そ開きけ細きも弟きも泥を添とよむか如し○ゑして色しよめる八万葉集
りいとかねをいえかくまれをかくまえに似らしをすらえさんてそけり

△えあ

△えい 口語の發語助語にいふ堅基記にえとよみえい発也ともいへり或ハ

曳字を用ゐたり○源氏にえい歌と書てまふとあるハ詠にて詠曲なるへしといへり

△えうまし 伊勢物語にえう侍らしかりけりとあるハ不敢得(エ)の意なり

△えうまん 御要人の字太平記にみえたり通鑑後唐莊宗紀より出て権要の
人をいへり

△えうをる 遥拝之義にて遥に彼こを拝する事なり○大神宮に遥拝
なといふも意同し

△えて

△えとち 新撰字鏡に阿伯を訓せり兄ハ父の兄をいふ

△えがち 枕草紙にすゝろにえかちに物いひさゝかとみえたり心得
ぐなれ意なるへし

△えきろのすゝ 驛路の鈴也禁秘抄に或ハ六角或ハ八角とみゆ日本紀及
令にくハし杜荀鶴が詩に驛路鈴聲夜過山とみゆ○世に称する所のもの
ハ西土の虎撑也ともいへり鹿嶋神宮に蔵するもの実形也

△えくに 倭名抄伊勢にも國名に見ゆ弟國に對すと飯野郡也

△えげ
△えこ　日本紀に長子をよめり兄子の義也○偏私をいふハ依怙の音なり
えこぜねといふ俗語もよりたのむかたなきをいふへし
△えさらぬ　源氏にみゆ不得去の義なり
△えしも　敢しもの義しもハ助けの辞也拝揖抱擁に人をいふ事も忘まし称ハ
とみえたり
△え寸
△えせ
△えぞ　毛人嶋をいへり明人輿地の圖説に野作(エソ)と書せるハ音をとれり
えぞの千嶋といふハ毛人嶋に沿る多くの小嶋を指ていへり毛人ハ宋書
にみえて續日本紀に蝦狄とみえて蝦蛦ハ唐書にみえたり兩山墨談にも交
易國ともいへり○えぞ松ハ檜に似たる一種の木にて蝦夷乃外まハなきもの
なりといへり今檜に代用う江戸古語に多し○えぞがりさハ蟒蝦也といへり
金錢をもやもたらうといふ○えぞより日本人を指てもやもといふ也つの

音なりや○周廻凡そ八百里といふ男ハ鬚多毛生て熊のごとし女ハ色白く共
に耳がねをさせり今津輕南部にも蝦夷人あり足渡古よりと云ハ日本紀に
書せるなし○文字なし縄を結び木に刻して記とす又醫業なし死せバ
山に埋むもろ人の秘蔵せし物ハ一所に埋ミ家ハ焼きて殘る家内の者ハ別に
住む其妻三年の間かむりものし慎む又再嫁せず凡て易産にて直に海
に入て血のさなぐ事なし生児も海にひたして虫けづく事なからずとぞ日本
人よりえぞをあひのものといふ日本と唐との間なるの義也えぞといへハ蝦夷人
もよもあいかふなしといひて悦ぶもよをしをハいやがるといへり家ハ垣が城のごとく
入口はまかりて外より内ハみえず晴天に獵船を出す時ハ濱辺へ小屋を造り
妻子をもそこに居らせ男少く女多く一夫に七八婦なるもあり長者の地
なり衣服ハ木皮熊皮狐皮等を用ゆ家内にて交情をいふハつつしむ絶入
来客ときに色欲の事なといへハ怒りて七ッの償物を出させるハ鎗大刀
矢筒煙草米餅衣服也人家に入ハ三度いひてこそ礼をなしやいふしかれども
あまでといふハ息災なりといふ挨拶之父子夫婦兄弟のある治せずなれたりとぞ

えぞしらぬ　不得知の義なり　頼朝の比迄は毛人にかけてよめり　えぞしらね
も同じ　新後撰集に定家卿
えぞしらぬ是や絵簾の寫すらん　ふりすてかゝる紀なき比須る
此詞よりえぞ摺と名つけて今に傳へり

△えだ　草木の枝をいふ　小枝(サエ)　下枝(シヅエ)　折枝(ヲリエ)なと詞によめり　茎莖に柯もよ
めり○物にさゝげもの一えだ二えだなどいふは伊勢物語にそこばくの
捧物を木の枝につけてさゝげたり今も長櫃をなずらへてえだなどいふも此也○
弓は幾枝といへり三代実録に見えたり老力に一えだといふも同じ○
肢も訓同じ人の四肢は樹の枝に同じ古事記には枝字を用ひたり
一枝を我らではいかでさゝらむ八十ゆまりの詞におなじかるべき
此詞は天寳中雲南の役に新豊縣の男戰ひを逃れて自ら太石をもて
己か臂を打折て左の手になり六十年をへたり八十八まで命をたもてりといへり
えだち　日本紀に役をよめり役務の義音をもて訓せる也万葉集に宮
木ひく泉のそまにたつ民とよめり今いふ人足なり

△えだがみ　儀式帳に枝神と見えて　貞観符に裔神とも見ゆ所謂末社也
△えだち
△えつり　日本紀に蘆雚をよめり枝釣の義なるべし今は多く竹を用ゆ
○延喜式に蓋(カサ)下棧料(エツリノ)と見えたり壁にもいふ語也和名鈔に棧を瓦のえ
つりとよめり新撰字鏡に棰をよみ枌を屋のえつりとよめり
△えて　得手の義得手勝手得手に棒得手に帆などいふあり○えて
忘るゝえて腹立るなど人の氣象にいふは離れての義なるべし文に不得
而知などいふもかなへり
△えと　干支をいふ兄弟の義なり干支は幹枝の義兄弟のごとくなれ
是は日本紀にも干支をえとかとよめりさればえとゝいふ詞は
十干の陰陽えは剛日とは柔日をもていへり甲を木のえ乙を木のとといふ
如く十二支はひとみといふ是なり
△えな　胞衣をいへり對するにはいやといふとぞ○隋書に琉球國婦人産
乳必食子衣と今此事なきかど混沌衣ともいへり○藐むすに一刀を擇ぶ

に崔行功か小児方に凡胎衣宜藏于天德月德吉方深埋緊築令兒長
壽とみえたり

えならぬ　深くとさもなくと二つの義ありといへりえならぬの義にさも
深くとすなはちえならぬは深からぬにて不得已の義なりやめ反えんと出
雲風土記に止屋を将て塩冶といふ事見えたり

△えにし　縁の音也しは助語様をせにといふがぬし也多く情縁に
いへり一説にゆゑ反えにしてゆゑよしの義ゆゑも縁なるもいへり〇伊勢
物語にかたゐ人のえまでもねるまねえにし又本の意ふかりしえにしとし
よめる皆縁に涉て兼ていへなり

△えぬ

△え禄

△えのきね　榎葉井と乗り大和也葛城にあり催馬楽
ふりふけるまちのえのきねにしらたまひぢておしとつきかけ
神宗寺とよまへてよめり

△えはう　吉方の義日吉をひえといふかぬし吉方は西土の古言のよみなり
又兄方と書て陽干の方を歳徳の所とするよりいでたりといへり

△えび　鰕をいふ式に蛉をよめり字書に蝦蟹距也とみえたり倭名抄に
俗用海老二字とみえたり伊勢えびは龍蝦なりといふより賀壽饗宴の席に
用は蓬莱盤中に必ものせ抱り海老の名によりて祝壽の義とするなし〇
神代紀に蒲陶をえびとよめり蔓草の鬚ある鰕に似たるをもて名づくに
はえびかづらといへり源氏物語にもみえ神代紀にえびかづらは野蒲陶也陶弘景も蒲萄
即是江南嬰薁といへり色ゑ江の源氏に見えしとふもの紫葛なりてそく
くらべて大宛の種は實多なり〇新撰字鏡に木防已を神えびと訓せり
〇燕尾　江次第にみえて細燕尾山槐記にみゆ倭名抄に纓儀云燕尾といへり
垂纓は江次第にみえて巻纓は西宮記にみゆ装束略抄に巻纓垂纓を音
に唱ふ武官弓箭を帯する日は巻纓也とみゆ抄に纓ををるとふは文官の
喪服の人も纓をまくといへり〇天野氏云纓は冠乃緒で脚ともいへし文脚幞
頭なりとみゆといへり〇俗に束髪のをさをえびといふも燕尾の義なり〇うつや

拇經にちひさき子の深き事をかゝて足をえびのやうにそらしてまへに病といへり
今もいふなるべし○海老名ハ古姓也東鑑にみゆ

えびら　倭名抄養蠶具に簿一名笛をよめり童蒙頌韻に簸をよむ祝して可愛枚といふにや後粉の訓に葉のえびらとよめり○箙室にえびらといふもの簿に象りたるなり左傳に房とみえたり太平記に平胡籙の箙ともみえたり○平家物語にたら箙といへるハ竹箙なるべし逆頬といふ物猶に古き制なりとぞ職人哥合にさゝづゝなくて祈えびらをまもるといへりさゝづゝハ小葛籠や又た箙角箙など有り葉紫えびらハ藤えびら也藤箙えびらハ猟えびら也○梶原生田の森の戦に咲かけたる梅が枝を箙にさして挿たる戦平家物語えんさうハたゞ箙とて優なりと記せる事盛衰記にみえゆ○えびら腰といふ結縒も蕪室を佩たる形といふ○梅品にみえたるハ忠度最後の時箙に結付られたる短冊なり今に簡ありまたる短冊箙と称せるもの制にならへり

えびのう　源氏にみゆ巴抄に採梅柤樹葉皮春篩之爲香故曰葉皮香と

みゆ或ハ衣被香といふ是と倭名抄にハ裛衣香を挙り活本作裛

えびすがね　本草にいふ閃刀紙是也裁製衣に浅さるをもて夷の法令に入さるを譬ふなるへしといへり

えびのちゃうに　式に蛉蟠槽とみえたり御手水の器也本朝の物なりといへり新撰字鏡に蛉をかつとよめる字義をしらず

△えふ　役符の音なるへし○徒然草に内裡のくしがたの穴ハ丸くてふちもなくてえふの入てあるものてゑれるハ深くそあかされしるされたり此えふハ葉の字音とされりくしかたハ今いふ尾焼にて葉の入られたる當時の風ありといへり

えぶの　古今集哥にみゆ其後ハ閻浮の事といへり續古今集の也ゑうにすみてまへらるよ此ゑ閻浮ハ閻浮提にて須弥山の南にあたる此世界をいふ梵書にみえたり崇徳院御事にて舟の事と侍りて荘周が故事をそへあわせし頭注にも竄動の是をとれるハ義の世なるへし

△えへ

△えぼし　倭名抄に烏帽子俗訛烏為烏さまれどもかし状がしらにも
のちがら絵ハ始してえぼしといふなるべし思ひしもあり荻生氏ハ弁れ遺
制也といへり世説に烏帽紗巾とみえたり○立烏帽子ハ本儀風折烏帽子ハ
略儀又引立烏帽子保元物語にかえぼしひき立てとみえて又塵袋記にみゆ
引入烏帽子さび烏帽子もみ烏帽子さらめ紀烏帽子侍烏帽子梨子打
烏帽子細烏帽子柳佐比なり又こや烏帽子十訓抄にみえてこゆひ烏帽子ハ大
諸礼にみえて唐人烏帽子ハ若聞集にみえたり○平家物語に烏帽子の外
嬌様とみえたり今ハ折といへり○鷹詞の装束に烏帽子の上に錦の帽子も
あるまじなり長秋記にみえたり○海東諸國記に室町氏の時の風俗を云に
人戴烏帽各佩二一刀一とみえて職人尽合せにあはせる図絵も亦同じさいへ
頂を露し帽を去るハ此後乱世の俗に始まる成べし○黒川氏曰凡烏帽子
左右共有凹處是謂諸額前額左邊有凹處者源家著之右邊有凹處者諸
家共用之左右之内方有凹者是謂片額俗誤為左折右折といへり○今死者
に三角の紙をかつらしも侍えぼしの古風也まで元禄の比まで八葬送ある者皆

此三角の紙を結て死者にハ三角の内に亡字を書てかつるといへり近比る縁の
ものよりは土えぼし也と佛家にハ宝冠といふ○えぼしおや烏帽子親の義
冠者といふ○貝の名に呼ハ形の似たるゆゑ即せの貝也○えぼし筆ハ空への方言
で百脉根のことといへり伊勢の国にて立えぼしといふなり

△えま

△えみし　日本紀に蝦夷をよめり蝦ハ鰕に同じ毛人ともよみえたり又ハ鬚毛
多く觧に似たる成にいふなへしえびすとも云す山海経に毛人國為人身生
毛とみゆ是古へにいふ北倭也

△えん　家にいふハ縁字なるへし縁道を略せし

△えんがり　縁がりを縁あるてをもるといふ紫式部日記にえんがりよう

△えめ　めくとみえたり

△えもん　衣紋とかけり海人藻芥に上代ハ皆太かる装束をきうたまて強くハ
不ㇾ調ゆゑ沙汰にて近比ハ羽院の御代より強き装束を用るゆゑに衣紋の

沙法師なとゝいふも絵師兄語なるへしといへり○平家物語に衣紋の撥桜とみえたり今いふゑもんなりといへるなり

△えやハ　えやハいふかしもいはざるなり得ていはれざるの意なり助の詞也

△えゆ　△えよ

△えらぶ　撰擇をよめり万葉集に見えたるもえらひといへりと
よめりらふ反なくしてえらむともいへり得とあふ意なるへし東の簡も同し

△えり　領をよめり縁領の音なるや或は衣ひといへり衣領の音なるや文選にもえりとひとよめり又衽襟をもよめり中山傳信録に襟有小缺勢といへり
○隠詞に穴峯の事をえと三種一統に見ゆ

△える

△えを

△えろ

△えま

△えね

△えゑ

△えれ

手の部

を　陽雄男夫なとの訓是也神代口訣に陽吹氣といふ喉音也○發語の辞にもいへり是をひえをそへたる字なとも見えたるなり文語中のやともめ字にもいへるにてをはりぬるそのゆんは結語にいひそへたるも同し又いひそへたるもあり○命の結語にいふをそへたり○小少をよむハ同韻通して乎呼弘をも用ふ音にも用る同
○尾麻弦緒なとハ皆延へり陽より出て長きをいふ神代紀に綸をよめり○さし此綾いとの糸を見ゆるのをそへたるなと結の字を用ゐたり緒
絲乃義なるへし○万葉集に綾をきみの實に文みえたりを劔の緒なとも
見ゆるとなりいへり○日本紀に峡峡なとをよめるハ山の尾の意なり尾
ゆもとよめる是なり凡そ地名に尾といふ事多し梅尾槙尾松尾高尾なと
皆此義なりといへり戯れ歌に楚山之尾常山之尾なとみえたり須尾猶末をも
いへり○万葉集に八峯岑なとよめり尾に根の義なりといへる同意なり古
事記に五十隠山三尾之竹矢とみえしも岑尾の義なるや○神代紀に丘陵
をよめるハ鵼の略語なり○神代紀に歟ををとよめり可愛少男歟可愛少

女歟とこハ古事記に据れり歟も字書に語之餘也といへり古事記に阿那迩夜志愛袁登賣袁といふを日本紀に妍哉可愛少女歟と記せり○古事記万葉集なとにてはをいへのをに矢を出り此字音によめる乎哉而者比哉也殊此語に當て訓したる也乎と同しく用る例ハ墨子に焉在矣来晏子に豈不多矣の類也○万葉集に焉をよみたり古今集にも載たり此殊多し字書に焉ハ決辞と注す○文に於于乎ををとよめり顔師古注に都ハ於也とあひし一所ありて殊とよむへし○神代紀に廻ををとよませる一所あり是も万葉集にをとよめるハ訓なれと殊とかよへる例多しされハ殊ともよむなるへし音にてハ和をもヲともよみ汙字を漢音にハウと呉音にハヲとよむかことし○袁遠越惋なと古來殊の假名に用來より開合にても反切にても愜ハ何り据るを知らすといへり○古書に曰字悪字烏字鳴塢弘なとその假名とせ

△をあはせ　総合此義等を引合するをいふなりそ

△をい　枕草紙に殊いまとなとこそ源氏にをいやさしし人あまりをといへる殊と同じと知へしおいといふハ誤なし

△をうと　夫をいふ男人此義ハをひとゝいふ音便に略してをとゝもいふ神代紀に丈夫を殊とめとよめる是也新撰字鏡にハをうとゝ見ゆ

△をえ　日本紀に痿字瘼字困字なとを殊とよめり和名抄に瘼をえとよめれハをふ成へし古事記に遠延とみゆ

△をく　日本紀に唯々をゝとよめり源氏にをゝといらくしとみえて枕草紙に殊くと同らちひさくてゑらせて今も人に応へて殊と出のや殊ゝといふ是也應の音よりいふハあしと祝詞なとに称唯といへるも殊くとよむへし口を閉るまくに声を出し口殊衛に開きて去声によりて神代紀にハ雄ことゝ書つ文選注に唯ハ謙應也とみえたり源氏に殊ともかりもいひ○警蹕も殊くといふ事に警蹕而後平伏と浅深抄にみゆ侍中群要に称警蹕其詞殊んとみゆ西土にハ出警入蹕といへとこハ互文也かれ済ハ同し叙紀に警蹕に殊んと唱ふるよ奄字也神供の時出御の時に唱ふ今公家方に式式遣より長声に唱ふ執弊人ハ道に清道といふ旗殊立て警固の官人唵と唱ふ文選の注に警蹕ハ清道也と是也此唵字ハ一切法門の根本なり故に陀羅尼の首に必此唵字殊安也と

見ゆ○女子は娘と呼かけて愛する辞とも見えたり神別紀の哥に
君をおきて誰をきてらかんわしと稚もかけてたくへし
わくし　日本紀に雄略雄抜をよめりわは男の義也おまてあると見ゆ也
きふひくて看へし
わくり　万葉集に和久理の哥なと見えたり其をいはれたるにや文獄の
わささは和久理文集へは盤紆をよめりまくしらぬさの若枝のさとりめかくと
いへるも見ゆ
△わか　岡といふ小高の義にや新撰字鏡に垤も陵もよめり岳も同し倭名抄
に訓与岡同と見ゆ○倭に陸をわかとよめり安藝に其ふといふ所をわかといへり
わがむ　神代紀に拝をよめり私記に身躰を折屈むの義といへり推古紀の哥に
をろがみてつかへまつらむをろかは手をたたくを拝といひ首と
手まてつるを拝手といひ首を地まてつくを稽首といひ額まて地を叩くを頓
首といひ稽顙といふ罪を謝し哀を乞には九頓首寸甚きに至るは叩頭出血と見え
たり○敏達紀に設齋孝徳紀に齋ををがみとよめり

をかき　万葉集に犯干冒侵の字をよみ又僭の字をもよめり小略の
義成へし左傳に凡師無鐘鼓曰侵と見えて胡傳には潜師掠境曰慢と見えたり
わかし　可笑の事をいふて土佐伊勢物語に此字をよめり東鑑に事咲をことく
わかしとよめり新撰字鏡には可咲をわかしとよみ見醜貞と注せり日本
霊異記に幸をわかしくおもしろめるは新なる也や神代紀の俳優之民を兼倶
抄にいかなる事も誹真をやつしあかしき事をいふて估んとしたり古へは名目
みもそふるなへしかし反さるなれともさと同しめで面白きをいふは末にて転し
て人をあさむくわかれ事をもいへり○わかしは社は摂州武庫郡尾崎にあ
るの文なり
わかたまは　古今集に見ゆ世は古今潜史には御賀玉木とみえる假名
たへり賢木をいふといへて招魂の義なるへし今も伊勢神宮は禰宜の宅地を
わか浦といへりきた反かえ日向國小戸のあやはあかりにいふ地はひらおも城
為し一説に門松は下に立る本をわかたまは本といふとみえり一本にはへ顔さる
よや日本紀竟宴の歌に

玉柏をかたまの木の鏡なるに神のしるしをうつしたるへなるかな
くまでさ岡霊の木の義にて其に柏といへるや又二木にや或ハ多の家をも見えて
定家の説と貞徳自筆の和歌宝樹にも宗祇の切紙を引して三箇の一として
古今集乃奥義ハ奇處の中に多き事也と見り後索良院享祿元十一月十
六日ここんの傳授於逍遥院とあること實隆公記ニ見ゆるとなり

△をき　神代紀に招禱とよめり又招一字もよめり古事記に其遠岐斯八尺
勾璁鏡及草那藝劔とみゆ遠岐ハ招禱にて招かえ也かく反さて神代紀に
圖ニ造彼神之象而奉ニ招禱一也といへるによりて其とる磐窟章にも瓊鏡を懸て
禱りし事に劔ハ見えて此劔ハ素尊よ出て別の具なるをしるて又とく記せるなり

をさむ　鷹をよび合家集にみゆ招餌の義也鷹を招き致するの餌にてをさむる
をき羅なとの事同し源氏物語に小弓の色をおもひ女けり此へに出る時ハ女わりと
へ餌袋ともいへり又女
新撰六帖ふりかの鷹の餌袋にをさむるさてかへしけるを
と詠をしも鷹やくて死なりそれより餌袋と人のいへるとを小鳥の餌入るるとなる

事なりとあるをへくるやとさらはといふなり
をきなハ　大鷹小鷹ニハ八へをといへり同書にて招索の義なり
をきかふ　招飼の義なるを重ねて餌をみせて招きたてつるをいふ鷹にハ呼とも
以ふくとりといへるにて招きよむとをもよめり
△をく　鷹をくなとといふも招慕の義をもいふとも同し○をくらしといふ
も招由の義なり
をぐな　日本紀に小男童女などとよめりをさなの義ふ對しる謀なり古
事記に少子もよめり
をくび　うなか御稜にも見ゆ社ともよめり小領の義なくし○吭とも見り小吭の義や
をぐるまのにしき　小車の錦て大神宮の御衣に用ゐさせらる御飾記
に刺車錦ともみえて孝德紀には車形錦ともいへり顕昭説に小車の錦ハ小車を
ちらべて丸にて文に織る錦てといへり○允恭紀によさくらがさ錦のひもとくときさ
げてこくんさりをて小車の錦の紐をとみ事よりひるも八等なり
小車のもろの紐の床ハうつしきをも錦の紐もハなかて加えり也

△をけ　万葉集延喜式に麻笥とあり和名字の如し高事玄義に麻桶とも
あり今の俗をごけといふ瓶書纂要に績桶といふ麻小笥の義なり○風神祝詞に
金の麻笥とみえたるハ塗たるをいふ金綰（クリ）金桛（カセヒ）も同じ○水桶をいふも今義解に
女神にハ麻笥をもうくといふに水桶をさせるハ穴を紙をもて張たる様ときくし延喜
式に水麻笥小麻笥とみえたり今も京にて此桶を麻笥の如くをたる圓と
し榛（ハリ）をもて縫たる物多しとぞ那波氏東山道紀行に信州古無竹造桶擔
為籠とも見えたり○倭名抄に俗に火桶水桶桶腰桶などの名ありとみえたり
○兵家に疊桶あり○類聚雑要に耳桶足桶あり
をけら　新撰字鏡倭名抄に朮を訓せり神代紀に奉招禱（ヲキ）とみえたり此
義によりてや天武紀に招魂（ミタマフリ）と同日に白朮煎を獻すとみえたり○古へ
白朮蒼朮をわかたず唯朮とのみいへり享保中より渡り種ありて都に赤白二品あり
をけらのまつり　四季物語に追儺の祭ハ朮のまつりともいへり今五條天神
の社に朮祭あり蒼朮と小麻をもてまつりをなし膳を供すとぞ
乃ち世諺問答にみえたり康富記にも出たり古き事なるべし除夕詣

朮をたく事ハ今廣家にも出
△をこ　源氏物語に人遠しとてをこなりといへりをこがましといへる名あり温庭筠南
蛮傳に烏滸人の事委くみえて笑はしき事多かり三代実録に嶋滸に作り
本朝文粋に嗚滸に作るハ皆誤なり二字ともに散楽に能ておかしき態をいふ
あり鐵草紙にハ少有嗚呼氣之人ともみえたり尾張と書ハ東鑑擇日本紀より
出て今ハ尾張を音にてよみて應神天皇の故事なとといへる大なる造言也京にて
乃人をあなどりていへる今昔物語にをこづきたる者といへるも今もいふ詞也
をごく
　動くをいへりうごくと通せり古事記の奇すもををごくとよめり字之集に
　うかまれ操のそよをごく風をいひもとりとかけりをごくとなるへし
をごめ　驕奢をいふ後も倨も同し雄凝る也蒙ふや○老子經に自敖（ヲコル）者不
長注に不長ハ不可長久也といへり俗にをごるもの久しからずといふ是なり
をこぼし　日本紀に誘字をよめり招（ヲキツレ）る義なるへし源氏に追ぶつりちらんれは
御ともに參る者保憲女集に追づり羊にかつまさる事をとくゆかしといへり日
本紀に有ををづくとも見ゆる也八通ぞり

をごめく　源氏に鼻のわたりをごめきてとみゆ蠢をよむうごめくに同し微動之
△をさ　長をよむは万葉集に里長川長舟長なとよめり皆をさむるの義なり治む
る事をいふ名とせるなるへし續日本紀に酋麻呂といふ首をもよみ同し○筬をよ
むも新撰字鏡倭名抄によれり糸のみだれを治むるものなれはいふなり或は筬又
柚をもよめり○鯨の鬚をも漁家に筬といへり一鯨に三百六十莖ありといへり○
通事譯語をもをさといふは韓語とみえたり日本紀に百濟の人名に曰佐分屋
といふもあり姓氏録蕃別に上曰佐下曰佐調曰佐等の姓あり又修辭の義にや
日本紀に譯語田とかけるを和名鈔に他田と書しは他国の語を正するに據る
成へし他戸親王なとよみも同し今は通事の音を用てつうずといへり○
今も氏姓に長田をおさだとよみ文部を長部とかけり
をさめ　枕草紙源氏物語にをさめみかはやうどなとも見えたり仙源抄に記録に
長女御厠人此字を用ふといへり倭名抄には領をよめり老女の義なるへしをさ
女房乃をさを領し治むるよりの名なりといへりさるは日本紀に專領二字を
たうめよめるもあり事一に領治する義と同訓なるをもて長女の義に

もる成へし○日本紀に葬をよむも收埋の義也禮記に葬者藏也とみえたり○古
事記に因大后之強不治賜八田若郎女とかけるは任大臣の時の語に治大
政大臣と有と同しく其妃に立てまつらぬことなり
をさむ　神代紀に理も馭も療も治もよめり修字領字收字納字なとも義
同しをさむるをさまるのむまるは自他の差也論語乱臣の朱註に乱は治也とみゆ
をさす　建をよめり支干に總ての字は北斗の斗柄をさしていへは尾指
の義なるへし斗柄を俗に剣先といひ北斗を破軍星とも七曜ともいへり
をさなし　日本紀に不賢不敏不肖なとをよめり長々しからぬの義也源氏
にをさをさしく丈本ありとかけり
をさなげ　ゆしつけのおとろかぬにをさむるをえたるとさまにせよ
○幼少をもをさな同し
をさをさし　日本紀に幹了軌制明直なとをよめり長々しき義也○万葉集
源氏物語大和物語なとにをさをさしくはつる詞なるにかよひて字ゆるも侍るなり
大和伊勢物語に治字を填て又頌のをさなりともいへり

△をしむ　惜をよめりをみむめもかよへはをしけりともいへり日本紀に愛をもよみ万葉集に娘をもよめり惜もをしむおしと相ふといへり少州の義なりといへる

ちやうなれと詞に愛するの意にもよめるは少しもすてぬといへり古書皆をなるを今はおと用来るはいかゞし

△をしふ　教又誨又訓をよめり人を教るは己が惜む情より起れはなるへし

かしこき詞なるへし

△をしき　東鑑に折敷と書り所謂方盆之一種也和草の音と見本に見ゆを折敷て杯盤となせし上古の名の遺れるものにて又角折敷といふ物もみえたり拾遺集物名に折敷をよめり続千載集に杉をしきとあり権記に銀折敷敷銀并絵折敷白折敷もみえたり不得折敷共に万葉集にをしきさゝげたる漢世くはいしきも折敷の類の名にあつかしき

△をす　日本紀に食をよめり和食聞食をきこしをすと見えたり霊異記に食國とくにをしくにとよめり　をしむとよめり古事記の訓に飲食をも見え○万葉集に小簾(ヲス)をもよめり○俗に虫魚の雄をもいへり

をすくに　古事記万葉集に食國とかけり食ハ禄也と云國語の注に食は禄也と云り続紀宣命に食國天下とも四方食國とも聞看食國ともみゆ

△をせ　日本紀の訓に令食ををせとよめり

△をせる　日本紀に睨又望又望見をよめり見あはせると同し望怖をよみたり

おそれてとよめり　△をそ

△をだまき　麻環の義紡麻(ウミヲ)の巻子(ヘソ)之外圓にして中虚なれは環に似たるを

○古今集にいにしへのしづのをだまきくりかへしとよみ曽丹かしづのをだまきのたゝけのまびろと見えたりをだまきは女の才とも云り○狭衣に谷ふかく立をだまきとよめるは杉の一種の名なるへし枯木と云り○一種の草をも名けしは実の形によりて象と白との品あり又放下僧といふ草ありて似たり

△をさけび　神代紀に雄誥をよみ古事記に男建に作り又をたけひともよめり男咄(サケビ)の義といへり横韻通す今尾張熱田に二月末日田植祭あり御田社の神供の膳を出るを呼て執去しむ其呼声ををさけびといへり

△をち　其名伊勢物語に遠近をちこちとよめり万葉集に彼方をよめり

をちともなき子○倭名鈔に芸薹を訓せり小立比義なるや今もてうちといへり

○越智直ハ伊豫にをちの郡あり

をぢ 倭名鈔に伯父を訓せり小父の義也といへり又季父をおとをぢ従祖父をおほをぢ族父をおほをぢ従舅をはゝかたのをぢ舅をはゝかたのをぢとよめり又新撰字鏡に阿伯をえをぢ阿叔をおとをぢと訓せり萬葉集にをぢがその日とよめるハ舅が其日の義也といへり○老翁を日本紀倭名鈔にをぢとよめるも伯父に准らへて翁の称也今も老たる人をよぶに親みてをぢといへり神代紀に舅をもをぢとよめるも叔父の義也孫炎か説に舅之言舊尊長之称といへり

をちかた 彼方の義なり神名式に山城國宇治郡彼方神社といへるあり源氏に川よりをちといへり又遠方とよめり○日本紀に水表をよめり釋に江河水を隔つる所といへるハ是也宇治の彼方なとよめるも此意也萬葉に遠方とよめり家々にも中臣祓にも此意無にハ唯遠方とよめるにこそ○新撰字鏡に耽をちかくとよめり

をぢなし 日本紀に懦弱をよみ又怯をよめり古事記の歌佛足石の歌なとにもよめり無男道の義なるへし竹取物語にもみゆ

をちく 日本紀に條々をよめり小路々の義なるへし條路よりいへる詞とみえたり

をちかへりなく 杜鵑千鳥なとにいへり遠帰鳴乃義なるへし百千といふ説ハ通しかたししかるを俗撰に万葉集を引るも誤れり

△をつ 小津をよめり古事記に小津之前とみえたるハ日本武尊比末なるハ日本紀に尾津といへる所なるへし伊勢桑名郡也神名式倭名鈔にも見ゆ

△をて

△をど 橋於小門日本紀にみゆなかし此大門(オド)にむかへて看へし万葉集に見えたり小戸も同し○万葉集にをどもおたえりと見ゆ武蔵小野に作る緑野郡に小野に作れり

をとこ 神代紀に少男をよめり小津子のつハ助語子ハ男子の通称也霊異記に壮をよみ万葉集に壮士をよめり古事記に壮夫をもよめり礼に三十曰壮といへり日本紀に丁をよめる又壮年をもよめり古今集に今こそあれ我もむかしハ男山とよめるも是也又元服の事を男になるともいへり○源氏にをとこたふるといへるハ夫をいふ也又日本紀倭名鈔に

吏とよめり○男栞ハ荻なりと藻玉集にみえたり○男山ハ山城國綴喜郡之八幡宮をいふ源氏にハ行敎宇佐の神託を蒙みて男山に移さんことを奏す貞觀元年なりとぞ

をとめ　神代紀に少女童女をよめり小津女之津ハ助語なりといふをとこに對へての名稱之義とめこともいへり万葉集に娘子處女未通女などかけり文嬬嬬をよめり嬔字ハ字書に若得寸篇海に嬔字なりて女不淨也と注せり嬬ハ説文に弱也一曰下妻とみえたり又漢女と書る義今おとなしきハいかゞやめとよめりさる義をとめとよめる説なり詩の漢ニ有ニ游女ニの注りよるなり萬葉集に神女をよめるハ義訓之乙女とかけるハ後世の俗称之假名なり○　神代紀に夫妻をよめるハをハ助辞夫と妻の義也

をとり　倭名鈔に媒鳥をよみ新撰字鏡に囮をよめり色鑑に注に囮ハ鳥媒也とみえたり○奥義抄にはつはらめはるまにその鳥ハをとりとなるあひ文字とこそ書と書り雄取の義にて要をめとるといふむかへる説なれハ遊を説ともとかくも同義なるへし

をとつひ　万葉集に前日をよめり全浙兵制に譯をるもまた同し彼津日之貫之が奇にさきおとつひよりきのふもけふもといへるにも泄とこそ

をとゝし　万葉集に前年をよめり全浙兵制に譯をるもまた同し彼年といふ一昨日ハ俗語なり

をとゝい　漢書に養此字をよめり厠養の義今の俗にをとゝいとも云なるをとゝしなとの如く是之公羊傳の注に炊烹者曰養とみえたり

をの　職人哥合にをのこ菊をとよめるハ萱荷の義なるへし○式伊勢安濃郡小丹神社なり今をのの式やとの如新に靡祠の路なり又丹ハ舟の誤神風抄にも小舟別各三斗とみえたれハ小舟村なるへし別ハ別部なるや

をぬ

をのゝ　信濃にハ山を小野と呼て小岩を訓る例にて畝の義といへり

をの　斧をよめり全浙兵制に大斧をよきと訓をよハ小斧ををのゝといふなし略すや万葉集に新羅斧をもみえたり斧に小野に寄てよめるも此なし

○斎に小野といふハ多くハ墓を野といへり祝詞に龍田の立野の小野とも見ゆ
又所の名にもなれり也足軒の説に淺茅生の小野も名所になりといへり○
小野妹子ハ近江国滋賀郡の小野村の小野小町ハ出羽国郡司の女なりと拾芥
抄に見えて本貫ハ此小野なり小野毛人ハ山城国愛宕郡の小野里也慶長十八
年に高野川の東涯より石棺を掘出せし墓誌の鎔金牌を得たり面に飛鳥
浄御原治天下天皇御朝任太政官兼刑部大輔大錦上と書し背に小野毛
人朝臣之墓と有り今高野村寶幢寺に納む惟喬親王の旧蹟も同し小野
宮と称せり今上野といふは小野の内の上の野なるへし煙十文字といふ歌も正徹

大原やをのゝ上野ゝ多かまもみゆるハ炭やく煙なりけり

正徹も此歌によめり小野宮殿ハ清慎公藤原實頼也後小野宮ハ藤原實
資公也藤原能實ハも亦称を同うす崇徳帝の時源師頼ハも亦同し小
野山荘ハ大納言南淵年名也愛宕郡修学院村に有りて尚歯會あるよし
是本朝尚歯會の始也小野美材小野道風ハともに能書の聞え有り源義朝
乃東国にむかふ小関より小野に至るハ近江蒲生郡の小野湊ハ伊勢度會郡也二

荒山の神小野猨麻呂ハ陸奥の小野と羅山文集に見ゆ小野の御牧ハ常陸国
なり小野の瀧ハ木曽祢覚の床の辺也

をのゝく　戦慄をよめり新撰字鏡に惴をよめり又慴をゝのゝくともよめり

をのえ　斧の柄の義柯之和名抄に柲をよめり伊勢の小野の江也ともいへり

○をのえくさりしといへるハ晋の王質か故事也今昔集に

いせの海をのゝ浦ゆ柄をもて都のつとそありけ

土佛参詣記にハ雲出河を三渡といふにをのえといふ所あり一志郡
名所拾遺にハ安河の川尻にし大湊の坤方古川といふ所といへり齋宮寮式
小野の尾野の湊之葉名宿は乾方にもなり式葉名郡尾野神社と見ゆ

をハ　万葉集に尾羽とよめり俗に尾も羽もなく尾羽打からしなといふ
ありさまに譬へいへる也

△をば　伯母叔母姨なとを訓せり小母の義也姨ハ神代紀に見え廣韻に母
乃姉妹也といへり倭名抄に王姑をおほをばとよみ従母を母方のをばとよめり

をゝ　緒をいふ尾より出たる反ふにてもいふ畢竟卒ても同し神

代紀に訖もよめり○俗語の了ノ字ハ矣字のことし死字之却ハ活字の下に用ゐる助語にて斬却活却なとゝよべりといへり○大夫の死を卒といふしゆつの音也今をつとむハ非し卒去事といふなり

をなり　尾張の国ハ南智多郡のかく尾の張出たるか如し一説に小墾の義也式山田郡尾張神社あり小針村にて香語山命を祭れり又中嶋郡に尾張大國霊神社もみえたり○續日本紀に太宰府帥大貳并三關及尾張守等始傔仗ことみえたるハ尾張の国ハ路四方に通して殊に非常を禁すへき地なれハなりといへり○尾張を混と書ハ尾閭を混潤とも書しに據る○熱田大宮司も尾張氏也兼久の役に範廣力を王師に勤め南朝の時に昌能も亦功あり

をはせかた　古語拾遺に男茎形を訓せり倭名鈔に玉茎をはせとよめり陽元(ヲハセカタ)形の義也陽元ハ神代紀にみえたり○大年神の男茎形を加へたまふハ笠嶋の道祖神の陰相を好たまふに同し十訓抄にみえたり

をはなかゆ　禁中にハ朔日に用ゐさせらるゝ也康富記にもみえたり昔ハ薄の黒焼を粥に雑えたりし今ハ早稲の黒焼を合すといへり同く行事にハ

米の粉を黒胡麻にて煉交たるをいふとみゆ

△をひ　和名抄に甥をよめり男生(ヲオヒ)の義なるへし爾雅注に甥ハ猶生也とみえたり姊妹之子曰甥と注せり○姪も称を同うす兄弟之子と注せられたるなり俗に侄に作るとみゆ

△をひれ　古事記に口尖(アト)之尾翼(ヲヒレ)鱸とみえたり世俗の語にをひれをつくるといへり

△をふ　終をいふ詞反ふさをへんハ佛足石碑にみえたり

△をべ　伊勢内宮外宮の山をゝべ坂といふ尾上にて事り倭姫世記に倭姫命自退尾上山峯石隠(イハ)ますとみゆ令義解に玄扈ハ石室名也とみえ石窟本縁に玄扈者宮子齋王父大神主小事石窟也とみえたり度会え長百首に

松風や小事の岩屋なりてまたちらぬ時雨の音のみそする

玄扈をゝべと訓せる義詳ならす本縁又云日鷲高佐山者是日本鎮府験在十二箇石室号玄扈也惣名高倉山是也ともみえたりかくれ今のいふ天ノ石戸なるへし

をへら　万葉集に小集楽をよめり顕昭説にゐなかの若き者の出集りて遊ぶ事をいふ世俗の詞に物をわめてゆゝしげなるををへらひなとするハ此遊ひをいふより来れるなるへしといへり

△をのこ　倭名鈔に尾株を訓せり馬にいへり

△をま　牡馬又駿馬をよめり和名抄に見えたり

△をみ　日本紀に麻績をよめりうを略せし詞也麻績とも書てをうみともいひしなり平家物語にをうみのうし光と見えて信濃伊奈郡麻績和名をみとみえたり○麻績神社ハ伊勢多気郡にありて俗に上館といふ井口村にあり機殿儀式帳に大神御霊称麻績屋姫神といふ是也古語拾遺に長白羽神伊勢国麻績祖今俗衣服謂之白羽此縁也とみえたり○小忌ハいを略せり新嘗大嘗の時にいふ詞也小斎とも書り大忌に對せり大小ハ麁細をいふ如く小忌ハ致斎の如く真忌也大忌ハ散斎の如く荒忌也

△をみな　女とよめり新撰字鏡に娃又孃をよめり又うつくしをみなとも見えたり麻績名の義なるへし日本紀の斎に神をとめとも見えたり麻績の少

女之紀に女の手末(タナスヱノ)之調と見え又をみなをうなともいふハ音便に

○女の男に変せし事宝永の始めに上総と下総との堺蓮沼といふ所の農民の女子歳十六の時俄に女根漸々に男根に変し面にも髭鬚生して後の男子と異なる事なし元文の頃に至りて六十餘なりしときこえたり

○女わらんべのはといふ諺ハ史記に鄙語曰兒婦人口不可用とみえたり

△をむらひ　万葉集に峯向とありむろとよむへし

△をんなめ　日本紀に妾をよめり麻績名妻の義成へし今も奥州なとにいふ詞也とぞ遊仙窟にハをんなめと訓せり神代紀にハ女を訓をちたれ日記にもむなめの事をといへり

△をめく　叫をいふをめくに同し易の號咷をおめきさけぶとよめり唯(ヲ)めく義なるへし

△をもの　日本紀に粮をよめり食物の義也御所をもよめり延喜式に御膳を訓し深山御記薩戒記なとに御飯固給(ヲモノカタラカニヘ)といへり古語なるへし御字ハおもてより添たるものにておものといふ言也物経にもをものまゐるといへり彦にそのものまゐらねなといふハ略語なり○御をおく須ハ今の

賭ぶことも見えたり日本紀に所供を調ふ所也
おもむく 神代紀に轆轤然とよめり 緒を棄る義なり
△おや 古事記に見え而小家也
おやを 日本紀に毒害をおやしやふるとよめり おえたる義やせ反え也
○下総にいふおやは弟也へき事をおやくといへ也
おやらふ家 日本紀に飲喫とよめり食遣(ヲシヤル)の義也
△おゆ △およ
△おら
△お里 日本紀に節とよめり神代紀に三節(ヲリ)神宴なども見えたり
度をよむも日本紀に見えたり古きに又ありともよめり折は折りの略語なる
唐しぬる金剛院の御時内書にて女院と云ものはなかりて右京大夫
素性なども秋の月を同じとりたるにはすなる事の上にみる
右京大夫八秋聞えし定国大夫伊行(コレ)が女にて建礼門院に仕へ平資盛
に思ひし人なり大系記なり○新にとりと留りたるは小町が詠にむやけ

なりと見えたり又おりくてといふは居くその義なり
おりく 前の体にいふ折句とこれ歌の篩を毎句の上又は毎句の末又は
其上下にて詠むをいへり其下に置を沓冠ともいへり
おりふし 素性伊勢物語に時折とよめり時なりくとよめるは折々と
いふも義かよへり
おりをし 式部の家の條に兆竹(サミ)折箸事と見て續日本後紀の也なり
折箸の本末のちもとへりといふ義にもあらし
おりひつ 江次第に折櫃と書り今木具の器に折を称しおのおの櫃といひ
魚鳥菓蔬に一折といふは此略なるべし縁をもおもへり絵折櫃
おらんゆ
おりたて 延喜式に神鏡の事に條折立とある旧記にさすけなると衣
昌泰にも見えたり織物唐綾などもあり
おりをやし 万葉集にみてたちおりをやしさ流ぐりなる狭きみてたち
やくおのやしやくくと呼ぶ賣ハ莖立ハ根本より採るをいひおりをやしは

中わとよりをれて又生たるをいふなるを
をりはへて　節映の義時節に相映していふなるべし山わとくこゝにを
よはへてともよめりはへともはへる古今集に見えたり○をりはへて
乃義も待るなるべし
△をる　をるゝは火採の義にや○居をるも折の義なるにや折腰折居
なるもいへり坐も同し折も居もかよはす意なるべし
△をこ　居語 吾語汝古と附のみ見えたりといふも同じ○卑俗にをこ
語は人に對していふ語末に往を來を本をつけていふも同じなるべし○
居は坐を謂ふ也西土は居若に待るは手を拱て立るをもて名るなるべし○をこ
て非ずなるともいへり今もくづなるといふ是也
△をろち　日本紀に蛇又大蛇をよめりをは尾の義ろは助語ちは靈也とも
いふめしちは雷也義畏るへきをいふ也○古事記の蛇乃比礼といへるは蝮
蛇を指すなるべし
をろのはつを　万葉集に見ゆ山鳥より尾の極尾の義極てながき尾を

いふなるより尾に同し
△をて
△をぬ
△をあ　阿波の郡名に麻殖よめり義は古語拾遺に見えたり
△をに